

---

# ナイト カクテル ~ 紅茶一杯のすどーりー ~

雪乃 静

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ナイト カクテル 〱 紅茶一杯のすとりー 〱

### 【Nコード】

N5038I

### 【作者名】

雪乃 静

### 【あらすじ】

男と女のストーリー。

その一片を切り抜きました。

超短編を綴った超短編ストーリー集です。



ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア。  
そんなつもりじゃなかったのに。

些細なことからの喧嘩だった。  
こんなに大きくするつもりはなかった。

なのに…。

ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア。

ごめん。

ごめんね。

街はこの日のためのイルミネーションに彩られ、愛し合う者達に  
華を添えていた。

ただ、今はその人混みがもどかしい。

ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア。  
「キヤッ」

「あつ、すみません。」

「あ、いえ、こちらこそ」

「大丈夫ですか？」

「は、はい」

男の肩に激しくぶつかり、危うく転ぶところだった会話はそれで終わった。

ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア。

改札を抜け、ホームへ駆け込む。

ハア、ハア、ハア。

……………。

「そんな…」

赤いテールランプが目の前で遠ざかっていった。  
張りつめた緊張が急速に解けていく。  
終わりを意味する解放だった。  
瞳が潤んだ。

「いさ」

振り返ると聡が立っていた。

「……………」

聡は伊佐子の驚く顔を見て、照れ混じりの笑みを浮かべた。

「メリー・クリスマス」

涙で聡が歪んだ。

1993年。

イブは緩やかに過ぎようとしていた。

メリークリスマスが言えない

「来年も来ようね」

そう言ったのに。

二人で乾杯したじゃないか。

港が見えるレストランは、去年と変わらない輝きを放っていた。

ポー。

イブの恋人達を祝福するような、港からのFOGHORN。

「メリー・クリスマス」

あの夜の君の声が聞こえる。

…君は思い出すのだろうか。

持て余した時間。あてもなく街を彷徨う。

「メリー・クリスマス」  
もう一度言いたい。

街は恋人達の特別な時間で満たされていた。

ハア…。

僕もあの中にいたのに…。

帰らない時間。

「キャッ」

「あっ、すみません。」

「あ、いえ、こちらこそ」

「大丈夫ですか？」

「は、はい」

よほど急いでいたのか、その女性は一礼すると走っていった。

ん？

頬に冷たい感触。

見上げると白い雪が舞い降りていた。

STAY WITH ME

おねがい、  
このままずっとそばにいて。  
そして流れる時を忘れて。  
あなたのぬくもりを感じていきたいの。

おねがい、  
私はあなたさえいれば、なにもいらないの。

だから…。

リリリリリリリリリリリ  
発車のベルが鳴る。

「じゃあ、行くよ」

「…うん」

二人の間に雪がちらついた。

## ピ・ア・ス

「よほど気に入ってるんだね、そのピアス」

彼は二本目のたばこに火をつけると、優しい眼差しでそう言った。

「そうよ。似合ってるでしょ？」

彼女は振り返ると微笑みながらピアスのついた耳たぶを左人差指で軽く弾いてみせた。

彼は無言のままだった。

彼女は残りのピアスを今度は彼に向けてつけた。

彼は相も変わらず無言のままだった。

スーッと煙を深く吸い込み、フーッと細く長く吐き出す。

「じゃあ、俺も浴びてこようかな」

彼は微かな笑みを残し、たばこを揉み消した。

シャワーの落ちる音、水の弾ける音が聞こえる。

カーテン越しのガラスの向こうは、もう、夜の終わりを告げていた。

そうよ。私はずっとこのピアスをつけるの。

だって、あなたにもらったものだから。

あなたが…、

あなたが私を思い出してくれるまで。

## 友達の詩

From Shun

僕は君にとって暇な時の話し相手がかまわない。  
ただ…、  
友達でいてほしい。

下手な相槌しか打てないけど、  
淋しい時は歌を歌おう。  
君が元気になるまで歌い続けよう。

だから…、  
忘れないで。

From Mimori

ねえ…、  
あなたはどうしていつも笑顔なの？  
どうして謝るの？  
私が悪いのに、あなたはいつも笑顔のまま。  
ねえ…、

どうして？

あなたのこと、もっと知りたいのに、あなたが見えないの。

本当のあなたが知りたいよ。

だって…、

好きだから。

## ジュリアン

ジュニア あなたの笑顔は日ごとにと

プリンセス・プリンセスの“ジュリアン”を君はいつもそう替えて歌っていた。

あの頃、僕はこの歌の歌詞も、君のこの行為の意味も理解しよつとしなかった。

仲はよかった。

でも…、

僕にとって、君は遠い存在だった。

だから…、

傷つくのが怖くて自ら距離を置いていた。

FMから流れる“ジュリアン”に過去が重なる。

もう、10年も昔のこと。

自宅マンションのパーキング。

ギギッ。

「はあ  
」

サイドブレーキを引き、シートに凭れると、一日の終わりを実感して息を吐く。  
いつものこと。

しかし今日は別の意味が大半を占めていた。  
過去への未練。

カチッ、カチッ。

気持ちを整えようとタバコに火を点けた。



え？

こんなせつない恋を私は忘れないでしょう  
くだけそうな心をまっすぐに大切に  
あなただけにかたむけていた

“ジュリアン”。

伊佐子の後ろで流れていた。

マリック

もう少し…、

もう少しだけ、このまま歩いていたい。

やっと会えた週末だもん。

せめて…、

せめて最終の新幹線まで…。

じゃなきゃ私、待てなくなっちゃうよ。

「君は強いなあ…」

私が悪いのはわかってる。

さびしいのにさびしいと素直に言わず、いつも強がっていたんだから。

でも…。

でもね、もう、それも疲れたよ。

だって…、

7年だよ。

彼女はそつと彼を見上げた。

しかし、彼はその視線に気づくこともなく前を向いている。

……。

彼女は俯いた。

イチヨウ並木の下を歩く二人に、イチヨウの葉が舞った。

「結婚しよ?」

翌日かかってきた彼からの電話。

受話器から聞こえた彼の声は優しかった。

## Nostalgia

「なんで？」

「ねえ、なんで？」

彼女は僕の胸で泣いた。

所詮僕はこんなものだ。

たとえ好きな女性が他の男にふられて泣いていても、胸を貸すだけ。

それ以外は何もできない。

彼女にとって、僕はこの程度の存在でしかないのだから。

僕は、車のドアにそっと凭れかけた。

彼女が愛した男、勇次。

僕と勇次と彼女とひとみの四人はいつも一緒だった。

しかし勇次が愛したのはひとみだった。

浜田麻里の“Nostalgia”。

開けっ放しのウィンドウに流れていた曲。

今でも僕のオーディオから流れている。

ENDLESS RAIN

君はしなやかに踊った。

純白の肌を桃色に変え、夜露を纏わせて。

外は雨。

もう長いこと降り続けている。

辺りをほのかに照らす明かりが君に反射する。

時に激しく、

時に優しく、

君は揺れた。

その切な気な表情は喜びの裏返し。

僕の中に炎がともった。

甘い息遣いと吐息。

雨はまだ降っていた。

It's Raining...

「久しぶりい」

「元気？」

「メール、届いたよ」

「そんなことないよ、ちゃんと写ってたから」

「髪、切ったんだね」

「似合ってるよ」

「ほんとだって」

「最近はどう？」

「いいちっ？」

「いいっちは相変わらずかな」

「さっきからね、雨が降ってるよ」

「そういえば、あのオルゴール直した？」

「そう、よかった。結構気に入ってたもんね」

「あれ？ 今、なんか飲んでる？」

「コーヒー飲めるようになったんだあ」

「じゃあ、今度一緒に飲める…ね」

「テレビはねえ、旅番組。今は温泉入ってる」

「何処かなあ、なんか話してるけど、音消してるからわかんない」

「あつ、DVD借りたまんまだね」

「いいの？」

「サンキュ」

「そういえば、昨日あの海岸通り通ったら、あの店まだあったよ」「また食べたくなった」

「聞こえてる？」

「あのグラス？」

「もう、家うちにはないよ」

「雨？」

「うん。まだ降ってる」

Good Morning Call

「おはよー、朝だよ」

「ねえ、起きて、朝ご飯できたよ」

漂うトーストとコーヒーの香り。

「おお、おはよ」

…え。

…あ。

ベッドの上で目と目が合い、お互い慌てて視線をそらす。

昨夜のことがよぎって、なんとなく照れくさい。

恥ずかしいとも感じる。

空は高く、爽やかな朝。

これからずっと続くんた。

D a r l i n g   w a k e   m e   u p  
G o o d   M o r n i n g   C a l l

心に流れる小泉今日子の“Good Morning Call”  
のメロディ。

そう、これからずっと続けるモーニング・コール。

私だけの、あなたへのモーニング・コール。

s e c r e t   b a s e   君がくれたもの

「そうかあ、ここもとうとう…」

あれは確か…彼からだったんだよな。

「一緒に帰ろう?」

不意にそう言われて、なんか照れくさくつてな。

でも、嬉しかったなあ。

彼は夏休みの少し前にやってきた。

転校生ということもあって、気にはなっていたが、ひとみしりと友達付き合いがあまり得意ではなかった自分には、声をかけることができないでいた。

だから、とても嬉しかったんだ。

そして、彼は夏休みの終わりとともにまた転校していった。

俺は彼とあの夏の終わりを忘れない。

あの、二人の秘密基地を。

ここでのことを。

10年後の夏、また会えることを信じて、涙をこらえたことを。

ありがとう、タカシ。

最高の思い出を…。

二人の秘密基地。

今は重機によって整地が進んでいた。

あれ？ タカシの名字、なんだっけ！…。

## DEPARTURES

ゲレンデに雪がちらついた。

「わあ、ねえ、見て」

「空は青いのに雪が降ってきたよ」

僕の横で彼女がはしゃぐ。

神立は何度も来ている。

彼女とのペアリフトもこれが初めてではない。

でも、こんなに鼓動が強いのは、ここに僕と彼女の二人だけだから。

もう、前を見ても振り返っても、仲間の顔はない。

リフトに乗るたびにジャンケンをする必要もない。

出会ったその瞬間に、僕は彼女を好きになり、でも、結果を恐れて距離を置いた。

彼女が僕を好きだとも知らずに。

だから、これが初めてのペアリフト。

同じシュプールを描く。

雪をかけあう。

これからは二人だけ。

これからは、ずっと一緒。

さよならも言えずに

あなたは自由だった。

私になにをしても許してくれた。

でも、そんなあなたが解らなくなった。

そして、遠ざかった。

なにも言わずに…。

なのに今は着信の中にあなたを探してる。

巡り来る季節の中で、今も…。

もう二度と会えないこと、あの頃の私は気づかなかったの。

電話が最後だった。

君はいつもと変わらず明るく話していた。

でも、僕にはこれが最後の会話になるんじゃないかって、

なんとなく、そう感じられた。

そして、その不安は的中した。

僕を嫌いになったなら仕方がない。

君を苦しませたくないから、

もう…、

このアドレスを消そう。

## TEENAGE DREAM

時計の針は12時。

あの日と同じ風がそよぐ。

そういえば、あの時もこんな夜だったな。

忍び足でここを抜けだしたのは…。

オレンジ色の街路樹。

俯く君を抱きしめたこの胸は高鳴った。

あんな気持ちは初めてだった。

愛おしい…。

自分にそんな感情があるなんて思いもしなかった。

最初で最後の想い。

ただ一人への想い。

浜辺で唇を重ねた初めてのキス。

そして、初めての朝。

今も昨夜ゆうべのことにように蘇る。

年月を経た今でも、心の中で繰り返す。

あの日のように…。

月明かりが木々を照らす。

かつて仲間と過ごしたコテージ。

今は一人テラスにたたずむ。

見上げた月に、グラスの中でロックアイスが踊った。

長い夜

頬が火照る。

「こっちにおいで」

「…うん」

炎を囲む二人に、それ以上交わす言葉はなかった。

ただ、寄り添う二人の優しく結ばれた手と手だけが明日を物語った。

君だけにこの愛を誓う。

あなただけにこの愛を誓います。

咲きたての恋に、二人は誓う。

このまま、この夜を飛び越えてみたい。

二人の願い。

夏の夜の冒険。

二人の夜は、まだ始まったばかり。

## 久遠

あなたは悔いのない人生を生きてほしいと言った。

自分の好きなことをしてほしいと。

「たとえそこに俺がいなくても、俺はかまわない」と。

でもね、私はあなたにいてほしい。

「あなたがいないと駄目なの。」

その時も。

だから…。

パキッ。

暖炉の薪が弾けた。

彼の肩に頭を凭れ、由希奈は炎にそっ想つ。

冬がはじまるよ

「誕生日、おめでとう」

「ありがとう」

「開けていい？」

「うん」

ガサガサ。

彼女は満面の笑顔でリボンをほどいた。

「わあ、シャツだあ、ありがとう」

「どお？ 似合っ？」

「とっても」

「ほんとありがとうね、シンちゃん」

「でも」

「ん？」

「どうして半袖と長袖の二枚なの？」

入道雲に蝉しぐれ。

もう、夏も終わるというのに、八月の空は青かった。

彼女と付き合って、もうじき一年が経つ。

水着姿はただけど、お化け屋敷での悲鳴やジェットコースターでの絶叫、ゲレンデを眩しくさせるほどのウェア姿はもう経験した。

あっという間の一年だった。

いろんな君に出会った一年だった。

これからの一年も、そんな君に出会いたい。

ハラハラドキドキの君に。

半袖と長袖のシャツはそのためのおまじない。

「冬になったら…、またスキーに行こうね」

「まだ秋も来てないのに、もう冬の話か？」

「だって、冬が好きだから」

「夏は？」

「嫌い。暑いから」

彼女は海も嫌いだった。

「見るのは好きだけど、入るのはしょっぱいから、いや」

というわけで、ビーチでパラソルはまたお預け。

でも、いつかはきつと。

この一年が早かったように、秋の通り過ぎるのも早いはず。

だからもう冬は目の前。

さあ、冬がはじまるよ。

Good night

「映画、面白かったね」

「そうだね」

別に映画じゃなくてもよかった。  
君と一緒にいられるなら。

「ねえ、今度はどこに行こうかあ」

「そうだなあ」

今度は僕の好きな場所に連れてくよ。  
君にもっと僕のことをわかってもらえるように。

いや、本当は君の好きな場所に連れて行ってあげたい。  
でも、どんなに君を笑わせても、僕は君のことを知らなすぎるか  
ら……。うん。

二人の車内に静けさが漂う。  
ただ、時間だけが流れていく。

「きもちいい」

助手席でウィンドウを下した美咲の火照った頬を冬の冷気が撫でる。

「あつ、青だよ」

「…うん」

はあ、

あの角を曲がれば、それで今夜も「おやすみ」だ…。

まだまだ君が遠い…。

ねえ

「ごめん…」

「…本当にごめんね」

彼女の頬を涙が濡らす。

彼は声にしなかった。

バックミラー。

風になびいた髪を押さえる彼女の姿が遠ざかる。

…そうかあ。

「わああ、気持ちいい」

彼女は息を白くしながら、コンクリート製のガードレールの上を渡った。

通り過ぎるヘッドライトの中で、彼女のシルエットが危なげに踊る。

「危ないって」

「大丈夫だよ」

彼女のこんなはしゃいだ姿は初めてだった。

…少し飲みすぎたかなあ。

彼は彼女の横顔を見上げた。

「もういい。だったら出ていく」

「もう、戻らないから」

崩れ落ちた彼女とともに、激しく切った電話がアスファルトに横たわる。

「うわっ」  
「ほらあ」

急なよろめきに、彼の肩に彼女の手。

「危ないから、もうやめろって」

「大丈夫大丈夫」

彼女は手をはなすと、なおもはしゃいだ。

ほんの数時間前、彼とのかつことを反対され、あんなに泣きじゃくっていたのに、この夜、彼女のはしゃぎ様はいつまでも続いた。

もしかしたら…。

あの時すでに終わっていたのかも…。

ねえ、美樹、どうして愛した人と結ばれないのかな。

俺、もう、あんなに誰かのこと、愛せそうにないよ…。

流れる街の明かりが滲んだ。

## 小さなラブソング

あなたは私を抱いて波打ち際まで歩いて行ってね。

私はあなたの耳もとに、優しくささやくの。

“愛してる”

って。

そして空が赤く染まったら、

海からの風に、あなたと渚のテーブルにたたずみたいな。

指きりしてね。

「いつまでも一緒だよ」

って。

もしもあなたがギターを弾いたなら、私は歌うの。

想いをこめたあなたへの歌を。

二人で夢みてた、南の海の島。

「ああ、なんか幸せだなあ。」

小さな窓に映る微笑み。

その向こうに彼の横顔。

え？

不意に、彼女の手には彼の手がそえられた。

振り向くと、笑顔があった。

## わがままな片想い

T I C T A C T I C T A C

あなたに会うたび、私の胸の時計は急ぎ足にときめくの。  
でも、「好きです」なんて言えない。

プライドが邪魔するから。

あなたが違う女性といるのはとても切ないけど、  
あなたの隣のイスが空いても座ったりしない。

誰かと仲良く話しては、すまし顔で背中を横眼で追うだけ。  
声だつてかけないわ。

あなたのまわりには優しい娘なら星の数ほどいるはず。

だから、私はとびきりつれない素振りをするの。

だって、その方が目を引くかもしれないでしょ。

でも、これじゃあ、やっぱり嫌われちゃうかな。

本当は、こんなにも愛してるのに…。

きっと、屈折してるのね。

走り出せないの。

「あ、ミキ？ 今さあ、みんなで飲んでんだけど、おまえも来いよ」  
今日も彼からの誘い。

タクシーの窓ガラスに、街のイルミネーションが流れた。

僕のそばに

「どっした？」

「え？ ああ」

「んーん、べつに…」

一瞬見せたその笑顔は、確かにあの頃のままだった。

でも…。

「なんかあったのか？」

あきらかに無理してた。

「ふられちゃったの、アタシ」

僕の二度目の問いかけに、君は瞳を潤ませた。

そ、  
「そう…か」

君がどれほどあの男を愛してたか僕は知っている。

こんな時、他の男なら優しい言葉や流行の台詞で、君をこの時  
だけでも、その涙から解き放すことができるのに…。

でも、いつも見つめてたんだ。  
僕はずっと…。

だからこれからは、いつでも僕の隣に座ればいい。

寂しい時も、  
悲しい時も…。

ピアノが奏でる“僕のそばに”のメロディー。

その中で、英明のグラスについた水滴が、静かに流れ落ちた。

## 恋の予感

「なあ、そんなに綺麗になつてどうすんだよ」

「いいじゃない。玉置君には関係ないんだから」

なぜ君はそんなに綺麗になりたいの？

どんなに誰かを待っても、星の間を彷徨い流され、夢の続きを見せられるだけなのに、夜の街が彼女を惑わす。

「かーのじよ、どうつ？ 今、暇？」

振り返ると、そこには玉置の笑顔。

「…なんで？」

「さあ、なんででしょう」

「でも、俺はいつものすっぴんの優子の方がいいな」

玉置が彼女の手を引く。

彼女はそのまま玉置の流れに流されていった。

## 夢ゴロチ

おいおい、さっきからずっと見つめられちゃってるよ。

星が見たいって言うから軽い気持ちで誘ったけど、こりゃちよつとまずくないか？

おいおいおいおい、脚、組みなおしたぞ。

うっわぁ、太ももが…。

オレは見かけよりもその気になりやすいのに。

や、やばい…。

どうしても目がいつっちゃっよ。

う、運転できねー。

あっ。

ほら、オレの中の悪魔が顔を覗かせちゃったよ。

「今日はいちだんと素敵だね」

って、言ってる場合か？

みる、彼女、満更でもなさそうにうつむいちゃったじゃん。

しかも意識するからか、会話がはずまねえし。

どうする？

なあ、どうするよ、オレ。

おおー、なんかドキドキしてきたー。

も、もう、いっっちゃうか？

いくところまで、いっっちゃうか？

やっ、やばい、顔が…。

あっ、ああああー、天使が離れてくー。

「着いたよ」

「今、ルーフ、開けるからね」

うっん、甘い香りが…。

夜風までが俺を誘ってるよ。

「ほら、綺麗だよ」

って、もうオレ、星どころじゃねえし。

彼女もせつかくの星空なのに、うわの空になってんじゃん。

「今夜は君を離さないよ」

「もっと深く知り合おうよ」

「そうしたら、もっと遠くへ連れていけるんだけどな」

くわー、こんなチャンスもう二度とこないかもしれないのに、こんなセリフしか言えねえのかよオレは。

え？ お、OK？

ほ、ほんとに？

「っっ、これは、凄いことになってきたぞ。」

すっ、すげーぞ、おい。

こんなこと初めてだ。

ゆ、夢じゃないよな。

じゃ、じゃ、じゃ、じゃ、じゃあ、今夜は甘い一夜ってわけだ。

うおー、もうすでに爆発寸前だ！。

え？

あ…。

な、なんで？

そんな…。

お帰りなさい、天使さん。

## TAXI

私はGeorgeの店の前に立っていた。  
土曜の夜だからあなたがいそうで…。  
サヨナラをした人なのに、  
雨に濡れたせいかしら、逢いたくなるなんて、

「…弱いなあ、アタシも」

あ…。

ガラスのドア越しに見慣れた背中。  
思いがけずときめいた。

今夜だけでいい。

愛してほしい。

そばにいたい。

そんな衝動が溢れ出す。

私に気づいたマスターがあなたに目配せをしている。

お願い、振り向かないで…。

「このドアを開けたら優しい声で、

「元気か？」

って訊かれないから。

じゃないとアタシ…。

だって…、

あの日から遠ざかるほどに、あなたが大切な人になっていくの。

## 二回目のキス

あれは現実だったの？

今でも夢のようよ。

あなたにされた不意打ちのキス。

私はまだ現実と夢との隙間で揺れてるの。

だから、これから確かめに行くね。

あなたへのアクセル踏んで。

ねえ、おねがい。

私に二回目のキスをして。

もしもあの夜のことが夢なら、この短い夢から覚めるように。  
そう、素敵な現実を教えて。

眠ってたすべてが目覚めてく。

世界で一番やさしい朝がくるのね。

ああ、あなたへの想いがあふれていく…。

ねえ、おねがい。

私に二回目のキスをして。

もう二度と夢から覚めないように。

世界で一番あなたを想ってるの。

だから…。

優子はミラーをのぞいて深呼吸をした。

## 慟哭

「なあ、聞けよ」

「いやよ」

「そんなこと言わず、聞けって」

「いや」

だって…、知ってるもん。

あたし、避けられてるかもしれない…。  
そんな予感、それとなく感じてた。  
なのに久しぶりの声が、

「話があるんだ」

だなんて…。

もしかして、あたし愛されてるかもしれない。  
って期待、かろうじて繋いでいたのに。

「なあ、どう思うっ?」

離れたテーブル。

視線の先にはあなたの愛する女性<sup>ひと</sup>。

「そうね、いいんじゃない」

「でもあんな女性<sup>ひと</sup>、どこに隠してたの?」

「ハハハハハハハハ」

あたし、なんで笑ってるの?

「ねえ、なんかここ暑くない?」

「あつ、そうか、二人の前だからか」

「おいおい、照れるじゃん」

なんで二人をひやかしてるの?

一晩中泣いて、泣いて泣いて泣いて、

あなたへの想いに気がついたのに、  
なんで?

ねえ、なんで一番先に知らせたのがアタシなの?

これじゃあ、まるで皮肉みたい。

「だからさあ、おまえも早くいい男、探せよ」

「そうね、そのうちね」

もう、彼女の前でからかつのはやめてよ、偉そうに。

いつしか、美雪の笑いには涙が混じっていた。

## ミセス マーメイド

雨が降り出した。

あの日の二人の約束だけで、僕はここに立つ。  
いとしくて、恋しくて、せつなくて、そして苦しくて、僕は君に  
会いにきたんだ。

どのくらい待ったのだろうか、Tシャツが肌にすいつく。

え？

傘を差し出され振り向くと、傘の向こうに微笑む君がいた。

大人びた笑顔に思わず息が止まる。

「はい」

なにも言えなかった。

なにも出来なかった。

ただ、立ちすくむだけで、僕は白いハンカチを差し出す君の指に、

唇をかんだ。

なにも知らずに君を待っていたのか…。  
もう、あの夏のあの恋は幻なんだね。

僕は本気だったんだ。

…だから、

だからもう、

「…さようなら」

木枯しに抱かれて

あなたとすれ違つと、私はいつもうつむいてた。

あなたに出会つたあの日から、私の心は気付かぬうちにあなたを  
求めてた。

あなたの背中を見つめ、愛の言葉をささやけば、  
とどかぬ思いが胸を駆け抜けて碎けるの。

でも…、

あなたは気づかない。

泣かないで、恋心。

私の心に、冷たい雨が降る。

もしも…、

もしも願いが叶うなら、神様、どうかすべてを忘れたい。

せつない片想い。

もうじき白い季節がやってくる。



## ロードショー

「久しぶりね、元気だった？」

「まさかこんな場所で開催うなんてね」

「まるで約束してたみたい」

「実はね、こここの店、久しぶりなんだあ」

「あなたと来て以来かな」

「で、今は誰といるの？」

「アタシ？ アタシは六時からロードショーよ」

「待ち合わせしてるの、彼と」

「あつ、そろそろ行かないと」

「待たせちゃ悪いし」

なんて下手な芝居なんだろう、アタシって。

派手なポーズをとりながら、わざとはしゃいだりなんかして。

本当は「さよなら」ためらってたくせに……。

店を出た優子は、人の波に流されて、街をさまよった。

## Happy Birthday

ずぶぬれの雨の夜、アパートの錆びたポストに届いたエアメール。  
君からのだった。

そういえば…。  
もうじき君の誕生日がやってくる。

去年は、みんなで騒いだ。  
でも、二人きりになった帰り道、別れ際に君は不自然な微笑みを  
残して、それきり振り向くことはなかった。

それが君との最後だった。

あれからいくつもの夜が過ぎ去ったのに、僕はまだ人波の中に失  
くした影を探してる。  
君がエアメールに書いたこの住所に立ち止まったまま…。

僕の心とはうらはらに何の迷いもないエアメール。

ずぶぬねのYシャツの胸にしわくちゃになってにじんだ。

「Happy Birthday To You」

いま、一番言いたい言葉が、

いま、一番遠い……。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5038i/>

---

ナイト カクテル ~ 紅茶一杯のすとーりー ~

2010年12月28日01時34分発行